平 成 ２ ４ 年 度
広島市教育センター

学習意欲の向上を目指した小学校社会科の実践的研究
－「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」に基づいた学習指導を通して－

広島市立井口明神小学校教諭　　沼　尻　理　恵

研究の要約
改正された教育基本法と学校教育法では，学習意欲をはぐくむことが明記されているが，自分自身を振り返ると，学習意欲がどのようなもので，どのような学習指導が有効なのか，明らかにしないまま実践を重ねていた。
そこで本研究では，学習意欲や学習意欲が育つ過程について文献研究を行った後，オーセンティックな課題を取り入れ，櫻井（平成22年他）で提唱されている「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」に基づいた小学校社会科授業を計画し，実践を行った。その結果,櫻井（2009）の「児童生徒の自ら学ぶ意欲を測定する項目」では，12項目中９項目が向上した。また，学習意欲を向上させる際の手だてをレベルごとに整理した。さらに，質問紙調査で把握した児童の学習意欲の傾向に合わせた言葉かけが有効であることを明らかにした。

キーワード：**学習意欲，「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」，オーセンティックな課題，学習指導，小学校社会科**

Ⅰ　問題の所在

改正された教育基本法と学校教育法では，学習意欲をはぐくむことを明確に位置付けている。教育基本法第６条２項には「自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることを重視して行わなければならない」と，学校教育法第30条第２項には「主体的に学習に取り組む態度を養うことに，特に意を用いなければならない」とそれぞれ規定されており，知識基盤社会において学校教育にとどまらず，生涯にわたって学び続けていく学習意欲が求められていると言える。

自己の社会科実践を振り返ると，学習意欲をその時間，単元で意欲的に学ぶだけのものでなく，児童が学んだ見方・考え方を次の単元や翌年度の単元，あるいは日常生活につなげるようなものであると捉えていた。しかし，児童が学んだことを生かすようになるために具体的な手だてをとっておらず，どのような学習指導が有効なのかを明らかにしないまま実践を重ねてきた。そこで文献研究等で，学習意欲とはどのようなものかを明らかにし，学習意欲を向上を目指した小学校社会科の授業モデルを構築する必要があると考えた。

Ⅱ　研究の目的

小学校社会科において，児童が学んだことを生かし，学び続けていくような学習意欲を向上させるための学習指導の方法を探る。

Ⅲ　研究の方法

１　基礎的研究
２　研究仮説の設定
３　検証授業の計画・実践
４　実践についての分析と考察

Ⅳ　研究の内容

１　基礎的研究

(1)　学習意欲とは何か

鹿毛は，学習意欲を「体験の積み重ねによって生じる長期的な成長に組み込まれた心理現象」とし，以下の三つに整理している。[1)]

- 状況意欲…刻一刻と変化するようなうつろいやすい意欲
- 文脈意欲…ある特定の活動内容や領域に対応した意欲の状態
- パーソナリティ意欲…生活全般に影響を及ぼすその人固有の意欲のあり方

また鹿毛は，「現実社会と結びついたオーセンティックな課題設定があれば，価値信念や目的信念に基づいた動機づけが生まれ，自ら調べてみたい意欲が起こ」[2)]ると述べている。

(2)　学習意欲が育つ過程を表した「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」について

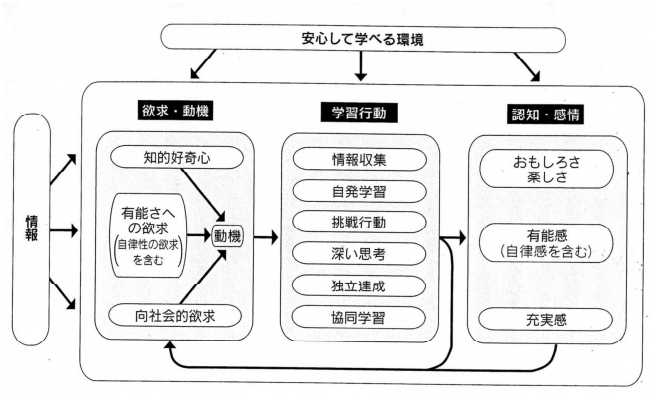

図１　櫻井[3)]による「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」

---

1)　鹿毛雅治『子どもの姿に学ぶ教師－「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」－』教育出版，2007年，25-27頁

2)　鹿毛雅治「学習意欲の構造から見た学校が取りうる方策－『状況意欲』に着目して教育環境のデザインを－」『BERDNo.13』，ベネッセ教育研究センター，2008年，６頁

3)　櫻井茂男「自ら学ぶ意欲を育てる」文部科学省『初等教育資料 No.861』東洋館出版，平成22年6月，87頁

表１　「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」の構成要素の説明と児童生徒の自ら学ぶ意欲を測定する項目（設問については一部抜粋）

Aレベル	B　構成要素	C　説　　明	D　質問紙調査の設問番号・項目	E　意図的に取り込んだ時間
認知・感情	おもしろさ・楽しさ	成功したときだけでなく，失敗したときにも感じることができる結果に依存しない感情。	7　失敗しても学ぶことはおもしろい。 8　新しいことを学ぶのはおもしろい。	第９時
	有能感	学習行動がうまくいったとき，成功したときに感じることが多い感情。	9　むずかしいといわれる問題でもとける自信がある。 10　友だちに質問されても，ほとんどのことはうまく答えられる。	第９時
	充実感	向社会的欲求に基づく動機が達成された場合に感じることができる感情。		
学習行動	情報収集	知的好奇心によって興味・関心のあることについて情報を集める行動。	11　疑問に思うことがあるとなっとくいくまで調べる。	第４時
	自発学習	自ら進んで学習に取り組んだり，計画を立てて学習したりする行動。	12　自分から勉強に取り組んでいる。	全時間
	挑戦行動	やや難しい課題に挑戦する学習行動。	13　むずかしい問題にであうとよりやる気がでる。	第３時
	深い思考	問題の解決法を複数考えたり，よりよい解決法を考えたり，仮説や教えを実践的に吟味したりすること。知識を獲得するだけでなく，獲得された有用な知識を用いて深く思考したりすること。	16　学校で勉強したことが正しいかどうか，家に帰ってもう一度考えてみる。 17　学んだことを自分や身の回りの出来事に当てはめて考えることがある。	第７・８時
	独立達成	できるだけ自分一人の力で問題を解決しようとする行動。	14　授業中わからないことがあったら，自分でじっくり考えてから先生に質問する。	第５時
	協同学習	友だちと協力して問題を解決する行動。	15　授業では，友だちと協力して学ぶことも多い。	第５時
欲求・動機	知的好奇心	珍しいことや未知のことに興味・関心をもち，広く情報を集めて考えたり，深く情報を集めて考えたりしようとする欲求。	2　疑問に思うことは，わかるまで調べたい。 3　学校で教えてくれること以外でも，いろいろなことを学びたい。 4　興味のあることはどんなことでも学びたい。	第２時 第６時
	有能さへの欲求	より有能になりたい，より賢くなりたいという欲求。	5　自分がもっている能力をじゅうぶんにはっきしたい。	第７・８時
	向社会的欲求	社会や人のためになることをしたいという欲求。	6　人の役に立てるような人間になりたい。	第１時
安心して学べる環境		子どもが安心して学べる物理的な環境と対人的な環境を指す。プロセスが展開するために重要。	1　授業でわからないことがあると，先生や友だちに聞くことができる。	全時間
情報		見たこと，聞いたこと，思い出したこと，考えたことなど。自ら学ぶ意欲が発現するプロセスに影響する要因。		全時間

櫻井は，「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」（図１）を作成し，「鹿毛の意欲の分類に従えば，『文脈意欲』あるいは『パーソナリティ意欲』に対応するモデル」[4]であると説明している。

このプロセスモデルは「安心して学べる環境」と「欲求・動機レベル」,「学習行動レベル」,「認知・感情レベル」の三つのレベルで構成されている。さらにこのレベルは12の構成要素から成り立っている。

また，櫻井の「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」中の構成要素「深い思考」は「吟味された有用な知識を用いて深く思考したりすることでもある。」[5]と説明されており，鹿毛の言うオーセンティックな課題と重なるところが大きいと考えた。

本研究では，児童の「心理状態」と言える学習意欲を把握する尺度として，このプロセスモデルに基づいて作成された「児童生徒の自ら学ぶ意欲を測定する項目」（表１の列D）を用いた。

２　研究仮説の設定

オーセンティックな課題を取り入れ,「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」に基づいた学習指導を行えば，児童の学習意欲を向上させることができるであろう。

３　検証授業の計画・実践

(1)　事前の質問紙調査

児童の学習意欲に関する実態を把握するために

4)　櫻井茂男『自ら学ぶ意欲の心理学－キャリア発達の視点を加えて』有斐閣，2009年，26-34頁

5)　櫻井茂男「自ら学ぶ意欲の測定とプロセスモデルの検討」『筑波大学心理学研究』38，2009，63頁

行った。（表１の列Ｄ）

(2)　実践授業

日時：平成25年１月10日～28日

場所：広島市立井口明神小学校

対象：第4学年1組　30名

単元：「広島県の特色ある地域の人々のくらし－総領町に観光客をよぶプランを考えようー」

目標：○　広島県内の特色ある地域の人々の生活を理解できるようにし，学習したことを活用しようとしている。

○　地図や具体的資料を効果的に活用し，地域の資源を保護・活用して特色あるまちづくりをしていることを考えたり，特色ある地域を関連づけて，活性化プランをたてることができる。（図２参照）

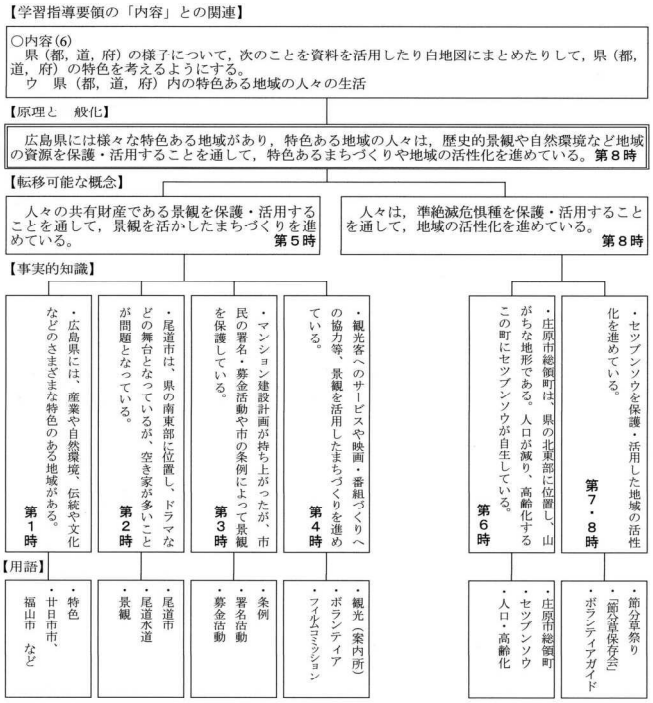

図２　単元の内容構造

実践授業では，児童の学習意欲の向上をねらい以下の４点を具体的手だてとして設定した。

①　「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」のほぼ全ての構成要素を組み込んだ単元計画（全９時間）を作成する。（表１の列Ｅ）

②　構成要素「深い思考」につながるような実生活，実社会に役立つことを実感できるオーセンティックな課題「総領町に観光客をよぶプランを考えよう」を設定する。

③　構成要素「有能さへの欲求」に働きかけるように，学習の見通しや目的を明確にし，「社会科学習登山」として提示する。

④　構成要素「おもしろさ・楽しさ」にかかわる充実感や構成要素「有能感」をもてるように児童の作品，自己・他者評価，教師の言葉かけを記録したワークシートを蓄積する。

(3) 事後の質問紙調査

検証授業前後の変容を測定するため，事前調査と同じものを行った。（表１の列Ｄ）

４　実践についての分析と考察

(1)「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」について

ア　学級全体について

全体として，学習意欲に関する質問紙調査の点数は授業後に上がっており，「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」に基づく学習指導が学習意欲を向上させることに有効であったと分析している。

特に，構成要素「自発学習」についての点数が高くなっている。この点については，学習の見通しを示したことや学習成果物を蓄積させていったことが自発的な行動に結びついていったと分析している。

しかし，学習の土台ともいえる「安心して学べる環境」の点数が下がっている。日頃から，落ち着いた学習環境で学ぶことや真剣に学習課題に向き合うことの価値に気付かせていく必要があると

考えている。

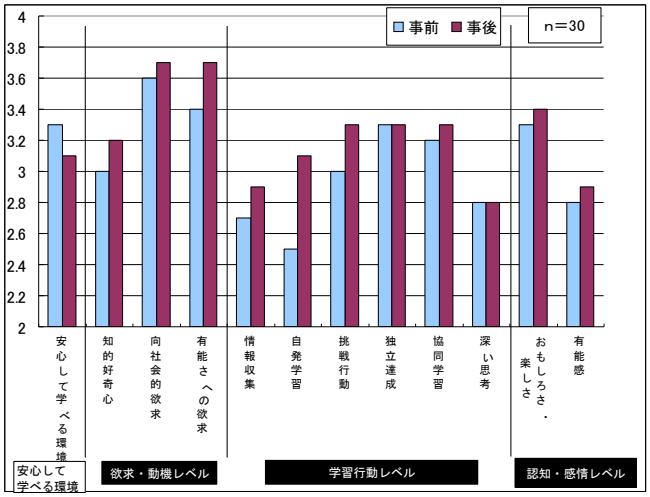

図３　各構成要素の学級平均の変容

イ　抽出児Ａ児について

事前調査で，「学習行動レベル」全般と「認知・感情レベル」の構成要素「有能感」の点数の低さが気になったＡ児に焦点をあててみる。

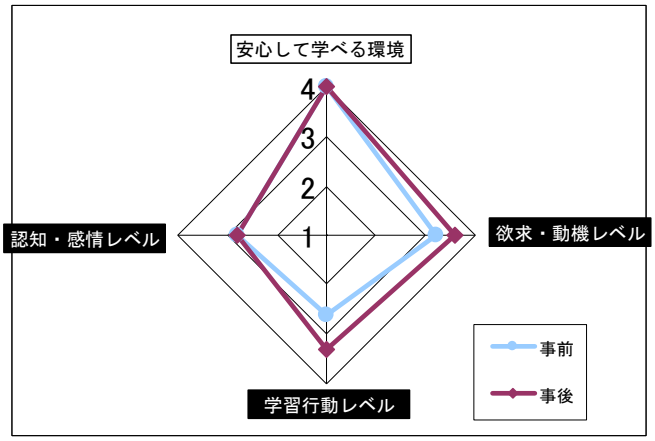

図４　Ａ児の「安心して学べる環境」と三つのレベルの変容

Ａ児に対しては，単元の中で自己評価や相互評価を行う場面を重視していった。本人が自己の学習活動に対してできているにもかかわらず否定的な評価をしている場面で，稿者が客観的に「できている。」と判断し，評価したことや班の仲間による他者評価が効果的であったと分析している。

Ａ児自身もこのような評価が入った第３時と第７・８時を自分で「うまくいった。」とふりかえっている。

事後調査では，「認知・感情レベル」の向上は見られなかったが，その前段階である「学習行動レベル」が高くなった。今回，Ａ児に以外にかけた言葉は表２にまとめた。

表２　各構成要素を意識した授業者の言葉かけ例

	構成要素	言葉かけ
認知・感情レベル	おもしろさ・楽しさ	（「楽しかった。だけど大変だった。」に対して）人はこう感じるときが一番充実しています。
	有能感	①も⑥も②もしっかり発表していたね。発表していなかった⑦⑧も十分うまくいったと感じて良いのだと思います。発表以外でも自分をほめてあげよう。
	充実感	
学習行動レベル	情報収集	
	自発学習	（「まだまだやりたい。自分でもやりたい。」というふりかえりに対して）ぜひ，やってください。それが本当の力です。
	挑戦行動	
	深い思考	（「みんないっぱい名案があって，すごいなと思いました。」という感想に対して）実際のまちづくりでも，その町の人がいろいろなアイディアを出すといっぱい名案が出ますね。
	独立達成	（独自のまとめ方をしたことに対して）自分で計算したことが生きていますね。
	協同学習	他の人のプランから学ぶと次が楽しみになりますね。
欲求・動機レベル	知的好奇心	△△くんの好きな魚を守ったり生かしたりするためにも社会科の学習が役に立ちますね。
	有能さへの欲求	
	向社会的欲求	○○さんもあなたがいろいろなことを発表してくれたおかげで，よくわかったと書いていたよ。
安心して学べる環境		こういう反応があると，安心して班の学習ができるよね。自分も相手にこういう反応を返せるといいですよね。

ウ　抽出児Ｂ児について

次に事後調査で，「学習行動レベル」，「認知・感情レベル」が向上したＢ児に焦点をあててみる。事前調査では，Ｂ児はＡ児と同様に「学習行動レ

ベル」と「認知・感情レベル」の点数が学級平均を下回っていた。

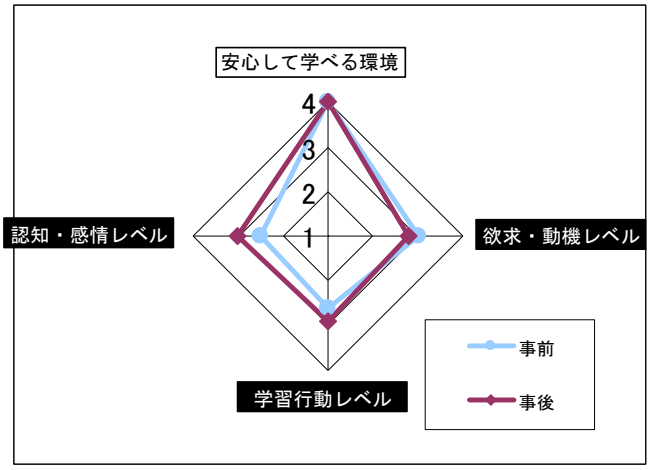

図５　Ｂ児の「安心して学べる環境」と三つのレベルの変容

Ｂ児にとっても，やはり評価の場面が重要であったと分析している。ただ，Ａ児と異なる点は学習に取り組む過程にあったのではないかと考えている。

第７・８時に，オーセンティックな課題に取り組んだ際，学級のほとんどの児童が初めて取り組む課題に戸惑い，最初は近隣の座席の児童に話しかけたり，周囲を見回したりしていた。そのような中，Ｂ児は開始当初から脇目もふらず，今まで学習してきたワークシートを見返し，他の児童が行っていない下書き（図６）から行っていた。時折，隣の席の児童に質問され，答えていたが，それ以外は黙々と課題に取り組んでいた。

このような活動の結果，完成したＢ児のプランは班内での交流でわかりやすいと評価され，（図７）その後，全体の場で班の仲間から「Ｂさんのプランはとてもわかりやすくてよかった。」と紹介された。さらに隣の席の児童から「紹介されてよかったね。」と声をかけられた。

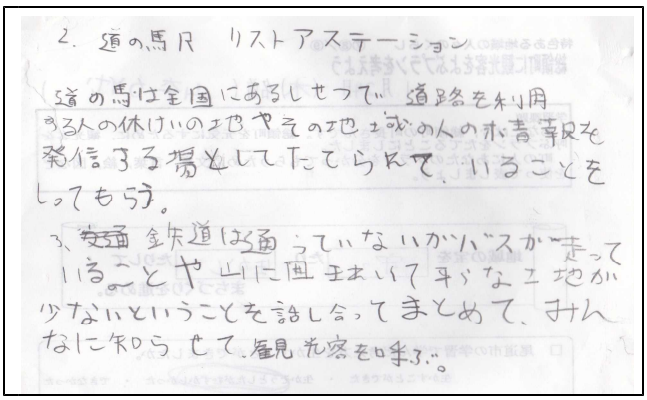

図６　Ｂ児の下書き（黙々と学習に取り組んだ場面）

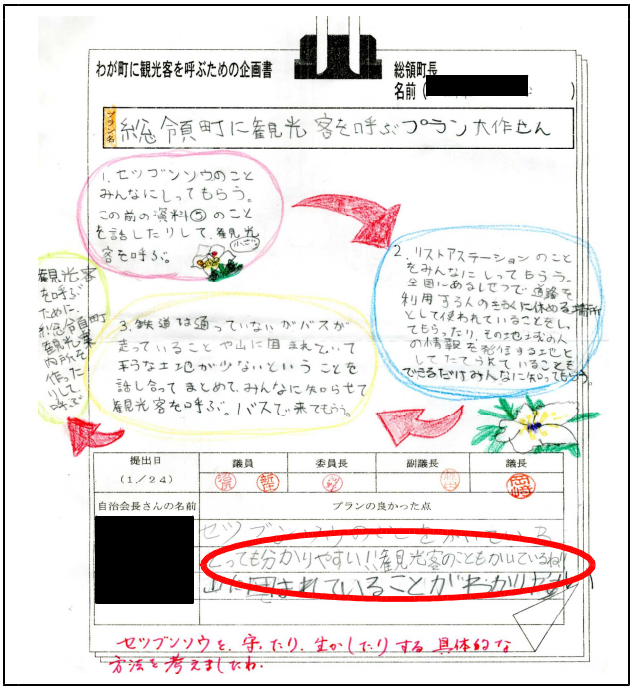

図７　Ｂ児のオーセンティックな課題とその評価

この活動のふりかえりで，Ｂ児は「考えるところはわからない時もあったけれど，おもしろかった。」と書いている。（図８）

授業者としては構成要素「深い思考」をねらって設定した課題であったが，難しいと感じた課題に取り組むために（「挑戦行動」），自ら進んで下書きに取りかかり（「自発学習」），自力で仕上げた（「独立達成」）Ｂ児にとっては，「学習行動レベル」の多くの構成要素が盛り込まれた学習となった。その結果，「認知・感情レベル」の「おもしろさ・楽しさ」，「有能感」の向上に大きく影響を与えたのではないかと考察している。

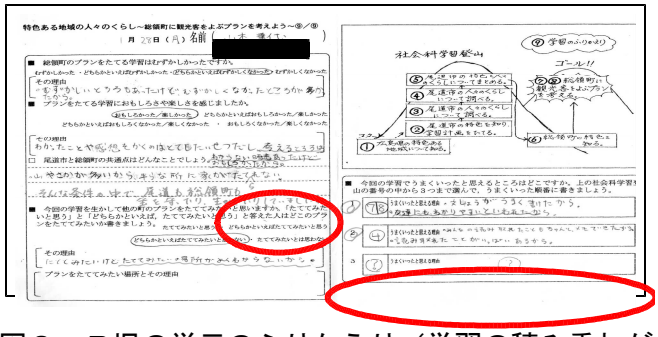

図８　Ｂ児の単元のふりかえり（学習の積み重ねが表出した場面）

(2)　オーセンティックな課題について

オーセンティックな課題を行い，「社会的な思考・判断・表現」の観点で，「尾道市の事例で学んだことを関連付けてプランを考え，分かりやすく表現している。」という規準で評価した。その結果，29人中（１人欠席），83％がＢ基準以上となった。Ｂ基準に達していない児童には追指導している。

課題終了後のふりかえりでは，「今回の学習を生かして，他の町のプランをたててみたいと思いますか。」という問いに対し，「たててみたいと思う」50％，「どちらかといえばたててみたいと思う」32％と合わせて80％以上の児童が意欲的な回答をした。そのため事後調査では，構成要素「深い思考」の点数が上がると予想していたが，実際には，数値に変化は見られなかった。単元終了直後に事後調査を行ったため，概念的知識を当てはめて考える学習活動をほぼ初めて行った児童が，実際に「当てはめて考えることがある」と言える段階にまで至ることは難しかったと捉えている。ただし単元終了２週間後に，以前に住んでいた出雲市について友達に電話をかけて調べ，学んだことを生かしたプランをたてた児童がいた。

オーセンティックな課題については，くり返し設定し，学んだことの有用性や有効性を感じられる経験を積み重ねていくことが重要であると考えている。

Ⅴ　研究のまとめ

１　成果

本研究では，「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」に基づく学習指導を行うことで，構成要素12項目中，９項目のポイントが上がり，児童の学習意欲が向上した。

また，学習意欲の向上をねらう際の条件を整理することができた。具体的には，「欲求・動機レベル」に働きかける手だてとしては，見通しや目的を意識化させたり，人や社会のためになるという学習の目的を設定したりすることが有効であった。「学習行動レベル」については，学習成果物を蓄積させていくことや実生活・実社会と結びついたオーセンティックな課題を設定していくこと，学習内容に合わせた学習形態の設定が有効であった。また，「認知・感情レベル」については，児童同士の相互評価が有効であった。

そして，質問紙調査で把握した各児童の特徴に合わせた言葉かけが有効であることも明らかとなった。「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」のどのレベルがその児童の学習意欲向上を阻んでいるのかを分析することで，個に応じた支援のあり方も見えてきた。

２　課題

今後の課題として，質問紙調査で，ポイントが下がったもしくは，変化しなかった構成要素「安心して学べる環境」，「自発学習」，「深い思考」に働きかけるための手だての在り方を探っていくこと，日々の教育実践の中で，児童の特徴に合わせた言葉かけ（表２）のバリエーションを増やしていくことが挙げられる。

今後も本研究で整理した条件を組み込んだ単元を開発し，継続して児童の変容を見取っていきたいと考える。

参考文献

①　栃木県総合教育センター『学ぶ意欲をはぐくむ-「学習に関するアンケート」を活用して-』　平成23年